

## 鈴木泰恵著『狭衣物語／批評』

萩野 敦子

本書は、『狭衣物語』を中心に先鋭的な物語研究を進めてきた鈴木氏（以下著者）の、一九八四年から二〇〇五年までに発表された論考をまとめた大著である。Ⅰ～Ⅴの五編に分けられた全二十一章中十六章を『狭衣物語』関係の論が占め、やはり大著である井上真弓氏『狭衣物語の語りと引用』（二〇〇五年刊）とともに、当該物語の研究の現段階における到達点を示す成果といえよう。

本書を繙くとまず、『狭衣物語』の近代的評価を決定づけたのは、やはり藤岡作太郎『国文学全史』であろう。以来、『狭衣物語』は『源氏物語』の模倣・亜流の譏りを蒙ってきた。」の書き出しに始まる「序」に迎えられる。近年さすがに「模倣・亜流」と端から切り捨ててかかる態度は留保され、物語の丁寧な読み解きが一定の成果を挙げ、『狭衣物語』研究をそれなりに前進させてきた。けれども、著者は続ける。「『狭衣物語』が、あるいは平安後期物語が、『源氏物語』に向かい合い差異を生み出し、異議を申立て、独自の物語になっている様子」は、「十分に汲みとられているとはどうしても思えない」と。それでは「模倣・亜流の評価を返上」したことはないのだと。

著者は、「先行の文学を対象化して、差異を生成し独自に至る

物語のあり方」を「批評」と名付け、それは「物語」を生み出すあらゆる営為に見出されるはずだとしつつも、とりわけ『狭衣物語』の標榜する「批評」性（「知」性と言ひ換えてもよい）が物語史において放つ輝きを見きわめようとする。『源氏物語』を絶対的な中心に据える物語史観が取りこぼしてきたものを掬い取るうとする本書は、著者自身の「批評」（＝異議申し立て）によつて既存の物語史ひいては文学史に戦いを挑む書でもある。

では本書の構成を追いつながら、具体的に諸論に触れていきたい。七章から成る「Ⅰ『源氏物語』への批評」の劈頭を飾るのは第1章「天稚御子のいたずら―「紫のゆかり」の謎へ」論である。初出論文は一九九三年に発表されており、管見では、著者が『狭衣物語』の特質を「批評」の語で取り押さえようと意識した最初の論文である。（ただし「批評」の語そのものは一九九一年発表の『浜松中納言物語』論＝本書Ⅴ―第1章から見えていた。）章題からも推し量れるように、続く第2章「『知』のたわむれ―「紫」が「紫のゆかり」であるならば……」論および第3章「形代」の変容―認識の限界を超えて」論との内容的関連が深く、『源氏物語』の主要モチーフたる「（紫の）ゆかり／形代」の問題に正面から切り込んだ『狭衣物語』の意気と成果を論じたこれらの三つの論考は、著者自身の『狭衣物語』研究におけるエポックであったように思われる。著者の研究歴としては「Ⅱ」編の諸論が先行する（ここに「批評」の語は見えない）が、本書の入口にこの三章を据えた著者の思いが感じられる。

そこでは「（紫の）ゆかり／形代」の問題を『狭衣物語』がい

かに読み解き、ずらしを加えて自らの方法の一端となしたかが明らかにされる。狭衣が恋してやまない源氏宮が「紫」性（藤壺性）と「紫のゆかり」性（紫の上性）の双方を担うことにより物語を膠着状態に陥らせること、狭衣と皮肉な関係に陥る女二宮が「発見」の手續きを経ないがゆえに代替になり損ねた「紫のゆかり」であること、等々、『源氏物語』を「批評」しつつ独自の物語を展開する『狭衣物語』の企てが緻密に論じられる。その緻密さを支えるのが著者の『源氏物語』に対する深い理解であることは言うまでもなく、『源氏物語』論としても示唆に富む。

後続の章も含め「Ⅰ」編を通して著者は、とすれば『源氏』取り」の一言で片付けられがちな『狭衣物語』の出来事や登場人物の形象に、『源氏物語』に対して「ラディカルな批評」（第5章）を試みるこの物語の〈知〉性を見出してゆく。

「Ⅱ」文学史への批評―狭衣の恋」は、狭衣と彼をめぐる女君たちとの物語に焦点を当てた五つの章から成る。上述のとおり著者の研究歴の最初期に発表されたものながら、論旨は言うに及ばず立論の手續きもほぼ初出のそのまま取められており、著者が『狭衣物語』の読みに対してなしてきた数多くの指摘の意義さが改めて実感された。と同時に、各章とも末尾に『狭衣物語』独自の方法意識や物語史上の意義を強調するための加筆がほどこされ、著者の現在の到達点との折り合いがつけられている。

「Ⅱ」編におけるユニークな主張のひとつが、狭衣の恋慕を、「非現実的なものへの憧憬思慕を象徴する要素」と「現実的な恋の要素」という二つの分裂した要素を抱え込むものと把握したこ

とである。この整理により、「いろいろに重ねては着じ」と源氏宮一人への愛を誓いながら飛鳥井女君や女二宮と関係し、しかも彼女たちを恋い続けるという一見不可解にみえる狭衣のありようが、物語の方法に叶うものとして評し直される。それを「浪漫的傾向と方法」（第1章）と呼ぶことについて、今少し説明が欲しいところではあるものの、「非現実的な思慕／（現実的な恋）」の違いを明確にしたうえで展開される「恋のからくり（第1章）」「思慕転換の構図（第2章）」「恋のジレンマ（第3章）」「恋の物語の終焉（第4章）」の各章は、狭衣の恋慕の皮肉な仕組みゆえに当の女君たちのあずかり知らぬところで彼女たちの運命があやなくに展開してしまうという物語全体のシステムを、見事に解き明かす。ひとつ些末な批判を加えるならば、私がいま「狭衣の恋慕」と表現した狭衣の思いの総体を本書は「（狭衣の）恋」と表現するため「現実的な恋の要素」と紛らわしく、著者の主張が不明瞭に受け取られる懸念なしとしない点であろうか。

「Ⅲ」文学史への批評―ことばの横溢」は、第1章「飛鳥井物語の形象と〈ことば〉―〈ことば〉のイメージ連鎖」論、第2章「ことばに埋没する女二宮―ことばのメカニズム」論、第3章「法華経引用のパラドックス―物語の〈業〉」論から成る。ここでは主として、「引用」が示唆しているはずの状況ないし「引用」から想定されるはずの状況を巧みに裏切ってゆく『狭衣物語』の〈知〉のありよう、そして登場人物の主体性すら無力化しつつ物語の展開を領導してゆく〈ことばの力〉のシニカルなありようが、論じられる。著者にとって「引用」とは先行文学の受容Ⅱ受動的行為で

はなく、先行文学への攻撃Ⅱ能動的行為としてある。初出論文では使われなかった「メカニズム」「パラドックス」といったカタカナ語が、恐らく戦略として多用され、『狭衣物語』の表現の仕組みがいかにドラスティックなものであるかを強調するのに一役買っている。先行文学を「批評」して成立する『狭衣物語』を「批評」する著者の鮮やかな手腕が楽しめる章でもある。

Ⅳ 『狭衣物語』への批評Ⅴ 物語／批評 収載の六つの章では、『狭衣物語』と同時期あるいはそれに後続する物語諸作品（後期物語、中世王朝物語、そして三島）の「批評」性が論じられ、『源氏物語』中心に語られてきた物語史に対する著者の異議申し立てⅡ「批評」が冴えわたる。なお、「優雅」の標榜という共通項により三島由紀夫『春の雪』と『狭衣物語』とのつながりを論じたⅣ―第1章はきわめて興味深かったのだが、「Ⅱ」編の鍵語「浪漫主義的傾向」と関連づける可能性はなかったらうか。

切れのよい文体に支えられた本書の立論は総じて明快で、システマティックな印象を放っている。その鮮やかさに瞠目する一方で、二項対立的な立論がなされる部分に若干の疑義を覚えるところもあった。たとえばⅠ―第4章は、『源氏物語』『狭衣物語』における「人の〈声〉」「人ならぬものの〈声〉」の〈力〉を分析することにより、両物語の王権／皇権に対する立ち位置の違いを明らかに出す論考であるが、『源氏物語』の故桐壺院の〈声〉を天照神の〈声〉と同じ「人ならぬものの〈声〉」のカテゴリに位置づけてよいのかどうか。またⅠ―第5章は『竹取物語』を視野に入れながら、幾つもの〈月の都〉を生成しては行き着けずに挫

折する狭衣のありようを解き明かす論考だが、物語の最終的な落着点を、源氏宮・女二宮Ⅱ〈月の都〉の住人／狭衣Ⅱ地上の住人、と言い切ってよいのかどうか。源氏宮が自詠において狭衣を「秋の月影」と捉えるからには、狭衣と源氏宮（そして女二宮も）の関係性は、片方が天ならば片方は地、その逆もまたしかりという、相対的な状況としてしか捉えられないのではなからうか。

システマティックな印象を放つもうひとつの要因は、本書が基本的に「物語」を主語とし、「作者」はもちろん「語り手」を主語とすることすら殆どない点にあるだろう。そういえば著者は、最大の鍵語である「批評」について、前述の井上氏著書が「読者（仮想の読者・女房）に豊饒な読みの可能性を拓く語りする方法としての引用」すなわち「語り手」の所為にかかわらせて用いたのに対し、「本書では差異の生成が先行の物語を対象化し顛倒させさえして、独自の物語を切り開く物語のあり方を表すことばとして」用いるのだと、その違いを殊更に強調していた（Ⅰ―第1章 注32）。恐らく「語り手」（女房ないしは女房文学圈に身を置く者が想定される）を取り外すことは、「物語」を生み出す営為における〈情〉的側面（たとえば『源氏物語』への過剰な親和など）を断ち切り、「物語」の〈知〉的な「批評」性を唯物的ないし客観的に証し立てるのに必要な手続きだったのだと思われる。既存の物語史ひいては文学史に異議を申し立てる本書にとって、取られてしかるべき立ち位置だといえよう。その選択を『狭衣物語』の本性に照らしいていか「批評」するか。この大著の恩恵に浴する者の課題である。

（二〇〇七年五月 翰林書房 A5判 五一八頁 税込二二六〇〇円）